

がはびこっていました。自分が皮膚科医になって、まともな治療法を開発するしかない、と考えて小野友道教授が主宰されていた熊本大学皮膚科に入学しました。

皮膚科医になって諸先輩方の薫陶を受ける中、アトピー性皮膚炎に対して次々と有効な薬剤が登場してきました。そして自分がアトピー性皮膚炎の基礎研究をする必要はないな、と感じるようになりました。現在は適切な治療にアクセスできればアトピー性皮膚炎はコントロール可能な疾患となっており、私の中でアレルギー疾患診療は今も大きな柱のひとつです。しかし悪性黒色腫（メラノーマ）の患者さんがなす術もなく亡くなっていくのを見送り続けるうちに、次第に自分も新しいがん治療の開発に携わりたいと考えるようになりました。

二〇〇五年にメラノーマを専門とされていた影下登志郎准教授の勧めで大学院に進学し、免疫識別学教室で西村泰治教授、千住覚准教授のご指導の下、がん免疫療法の研究に没頭しました。ES細胞にメラノーマ抗原遺伝子を導入し樹状細胞に分化誘導し、マウスメラノーマを治療する研究で学位を取得

しました。

二〇〇九年に熊本大学皮膚科・形成再建科に戻った後は、尹浩信教授のご指導の下、自由に診療・研究・教育をやらせてもらいました。細胞のソースはES細胞からiPS細胞に変わり免疫細胞療法の研究を続けました。またメラノーマの腫瘍特異抗原の同定、血清バイオマーカー、未分化維持因子スクリーニングからの新規治療標的探索など、メラノーマの制圧のために思いつくことはなんでもやってきました。その間、熊本大学の各診療科、基礎系講座、日本全国の研究室、海外の研究者と積極的に共同研究を行ってきました。

二〇二〇年三月、教室の父のような存在で、私のメンターであった尹浩信教授が急逝されました。悲しむ暇もなく准教授として教室を守るべく奮闘してきましたが、この度、教授を拜命することとなりました。熊本大学皮膚科・形成再建科のよき伝統を守りつつ、これを発展させていく所存です。新規治療や診断法を開発し、熊本から世界に発信する教室にいたします。そして皮膚科と形成外科を必要とする患者さんの心に寄り添い、最先端の医療を提供

する人材を育てて参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

**熊本大学大学院生命科学研究所
細胞病理学講座**

教授 菰原 義弘



令和三年三月一日付けで、熊本大学大学院生命科学研究所細胞病理学講座教授を拜命いたしました。これまで支えて頂きました熊本大学や他施設の先生方には心より感謝申し上げます。

私は平成十二年（二〇〇〇年）に熊本大学医学部医学科を卒業しました。学生の頃から病理診断や病理解剖、がん研究に興味があったため、すぐに大学院（病理学専攻）に入学しました。学生の頃に故高橋潔名誉教授の病理のマクロファージに関する講義が印象的だったこともあり、高橋先生の次に教授になられた竹屋元裕先生が主宰される細胞病理学（旧第二病理学講座）を選択しました。マクロファージの研究を行う傍らで、大学病院病理部や市内

の基幹病院に出入りし、病理診断も勉強することが出来ました。大学院卒業後は久留米大学でがん免疫の研究に二年間従事しましたが、その後、細胞病理学講座の助教にして頂き、がんマクロファージの研究を始めました。最近ではマクロファージががん免疫の誘導や抑制に複雑に関わっていることが明らかになりつつあり、がん免疫に関わる研究を重点的に進めています。当教室は免疫組織化学的手法を得意としていきますので、様々な分野の研究を手伝う機会に恵まれ、これまでがん以外の疾患も幅広く支援してきました。また、工学部や薬学部の先生方とも共同研究を進めています。これからも同様の方針を引き継ぐとともに新たな手法を積極的に取り入れ、これまで以上に熊本大学全体の研究推進に貢献できるように努力して参りますので、今後ともご指導、ご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

